

人間は美しく、たくましく、バクテリアなり。
われは一介の町医者、走り、走り、走り、生をを終らん。



カンザシ先生

今村昌平 監督作品



柄本 明 麻生久美子 JACQUES GAMBLIN 世良公則 唐 十郎 松坂慶子

田口トモロヲ 金山一彦 山本晋也 北村有起哉 神山 繁 裕木奈江 渡辺えり子 伊武雅刀 小沢昭一(友情出演) 清水美砂
監督/今村昌平 原作/坂口安吾(『肝臓先生』角川文庫刊) プロデューサー/飯野 久 松田康史 脚本/今村昌平 天願大介 音楽/山下洋輔
撮影/小松原 茂 照明/山川英明 録音/紅谷恒一 美術/樺垣尚夫 編集/岡安 肇 助監督/桑原昌英 製作協力/ベネッセコーポレーション IMAGICA
今村プロダクション 東映 東北新社 角川書店 提携作品

カンヌ国際映画祭特別招待作品



開業医は足だ。
片足折れなば片足にて走らん。
両足折れなば手にて走らん。

世界中のマスコミから 早くも絶賛の声!

『橋本節考』(’83)、『うなぎ』(’97)で2度カンヌ国際映画祭グランプリ(パルムドール賞)に輝いた今村昌平監督待望の新作『カンゾー先生』が、遂に完成。本年度のカンヌ国際映画祭では特別招待作品に選ばれ、世界中のマスコミから絶賛された話題作である。

物語は、敗戦直前の瀬戸内を舞台に、何でも肝臓病と診断し、人々から「カンゾー先生」と呼ばれる町医者と、彼を取り巻く人々の人間模様を、時代の風刺をこめつつ、ほのぼのとダイナミックに描いている。

原作は坂口安吾『肝臓先生』(角川文庫刊)。大戦後に原作を手にして以来、映画化の構想を練っていた今村監督は、この『肝臓先生』に、監督自ら影響を受けたと言う安吾の『墮落論』『行雲流水』を組み合わせ、一遍のストーリーに仕立てた。父が開業医であった監督にとって、これは「現代医療に対する批判と同時に、父への鎮魂歌である」と言う。

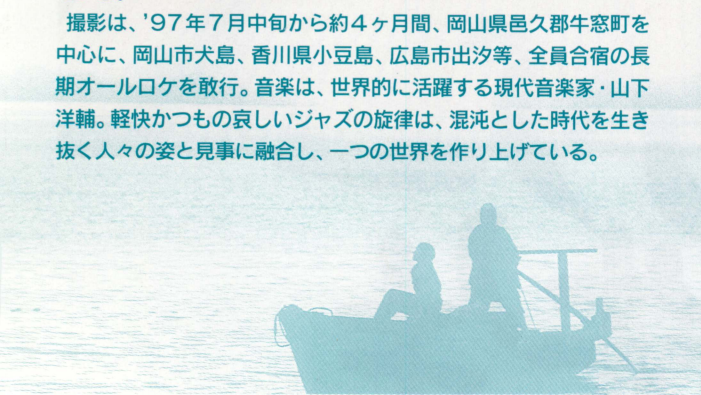
出演は、『うなぎ』に続いての今村作品となる柄本明。ヒロインは、新人・麻生久美子が抜擢された他、フランスの名優ジャック・ガンブラン、世良公則、唐十郎、松坂慶子等、個性派・演技派が顔を揃えている。

撮影は、'97年7月中旬から約4ヶ月間、岡山県邑久郡牛窓町を中心に、岡山市犬島、香川県小豆島、広島市出汐等、全員合宿の長期オールロケを敢行。音楽は、世界的に活躍する現代音楽家・山下洋輔。軽快かつもの哀しいジャズの旋律は、混沌とした時代を生き抜く人々の姿と見事に融合し、一つの世界を作り上げている。

「お前と言う女子は激しすぎるぞやることが…」
「うちはバクテリアじゃけえ」

昭和20年夏、岡山県日比。町医者、赤城風雨(柄本明)は、「開業医は足だ。」という父の遺訓通り、往診に走り回るが、誰をも「肝臓病」と診る為、「カンゾー先生」と揶揄されている。そこへソノ子(麻生久美子)が看護婦として来るようになった。ソノ子は田舎町には珍しい美女であるが、親もなく、幼い弟妹を養うために時々「売春」まがいの事をしている。ソノ子の母親は女郎あがりで、幼い頃から「タダマン」させるのは、生涯一人きりだ」と教えられていた。「タダマン」じゃないから金を取るのは、ソノ子なりの道理である。しかし「近所の間こえが悪い」と隣組の区長が赤城に監視役を押し付けたのだ。ある日、ソノ子は傷だらけのオランダ人脱走兵ビート(ジャック・ガンブラン)を病院に連れて来た。赤城は、モルヒネ中毒の外科医・鳥海(世良公則)、生臭坊主の梅本(唐十郎)、料亭の女将・トミ子(松坂慶子)ら仲間の協力を得て、ビートを看護してやる。母国でカメラ会社の技師だったビートの協力を得て、赤城は顕微鏡作りに没頭。それもこれも肝臓病の研究に役立てたいという一心からだ。ソノ子は勇気と正義感に満ちた赤城の生き様を見つめ「タダマンの相手は先生に決めた!」と赤城に迫る。

やがて赤城の肝臓病に対する情熱は執念を超え、狂気へと近づいていくが――。



10月17日(SAT)全国ロードショー